

女性 アドバイザー

熊崎 みどりさん
(60歳・萩原町尾崎)



インタビュー **INTERVIEW 2**

―農業に携わるまで―

農家に嫁いで第二子を出産されるまでは、会計事務所に勤務されていたというみどりさん。これまでの経験から子育てと同時に始めたのは農業簿記だったそうです。

やがて、畑にも出るようになり、家事との両立となりました。「その頃は家と畑の往復ばかりしとったよ」と笑って話されます。

―女性アドバイザーになったきっかけ―

そんな時、視察研修に行ったのがきっかけで、県の職員の方から「アドバイザーになってみないか」と誘われました。当時は、町長と農協の推薦が必要で、2年間の研修が必須だったそうです。

アドバイザーになってみると、「せっかくなら交流しよう」と、県内や飛騨地区の女性アドバイザーによる勉強会や視察研修などに積極的に

参加しました。そして、すぐに仲間もできて同業の女性と悩みなどを話すことができました。さらに、先進的な苗植えの方法などを教えてもらい、実際に自分でもやってみることで、仕事の効率があがったそうです。「女性はおしゃべりが好きやし、柔軟やで、いろんな情報はいってくるんやよ」と、みどりさん。家と畑の往復だけの生活から一変していろいろな場所へ出向き、たくさんの人と知り合うことができました。

知り合った仲間と農業の普及活動で寸劇を行ったり、会議では人前に出て話をすることもありました。それもすべて自分磨きになったそうです。「女性は大変忙しい。若いうちは子育て、中年時代は介護、さらには家事と仕事の両立もしなければいけない。それでも、もっと女性の活躍の機会の創出が必要」とご自身の経験から語るみどりさんの言葉には重みがありました。

―女性アドバイザーとして―

現在、下呂市でたった二人の女性アドバイザーである、みどりさんの任期も残すところあと1年となっていました。18年前、アドバイザーになった時から少しずつ食育について普及活動を行ってきたそうです。その甲斐もあつてか、昔に比べて最近の若い人たちは、漬物や味噌など家庭で加工品

を作ることやオーガニック食材に関心が高くなってきたと感じているそう。これからも女性目線の食育活動は大事だと思われているとのこと。そして最後に、「アドバイザーとして最も大切なのは、家族の理解と楽しそうに農業をしているその姿なんやよ」と言うみどりさんの言葉に、家族と農業に対する深い愛情を感じました。



家事と農業、
アドバイザーも
務める熊崎さん



下呂市
青年農業士会長

中島 悠さん

(35歳・金山町菅田桐洞)



インタビュー **INTERVIEW 3**

―就農のきっかけ―

高校を卒業後、地元のガソリンスタンドで働いていたという悠さん。

祖父母が体調をくずしてしまったこと、また、自身の結婚のタイミングもあり、仕事を辞め、家業を継ぐことになりました。もともと家業のことは心配しており、長男である自分が継ごうと決めていたため、就農はなんの抵抗もなく自然な流れだったそうです。

―青年農業士として―

子どもの頃から父の仕事ぶりを見てきたせいもあって、順調に農業の道を進んでいると思いきや、悠さんは課題に直面します。かつては、日本人の主食として食卓になくはならなかったお米も、食の欧米化や少子化などにより、米離れがすすんできていたのです。そのため、米を作る田んぼはあるのに、作っても消費されない。お米が余ってしまうという状況が起っていたのです。

そんなとき、岐阜県の青年農業士の声がかかりました。当時、下呂市内で青年農業士はたった2人しかおらず、責任感の強い悠さんは仲間を誘って、青年農業士となりました。岐阜県内の青年農業士が集まって研修を行ったリ、先進地へ視察に出かけたり、農業と言っても稲作だけでなく、野菜の生産から畜産まで幅広い青年の集まりです。悠さんは、彼らからいろんな発想を勉強することになります。

―生産から消費へ―

まずは、同業の県内の青年農業士と情報交換して米の販売経路を確保しました。それにより、米の生産を調整する必要があると。昔は生産だけを考えて米作りをしていればよかったのですが、今では、消費量を確保し、それに合った生産をする必要があります。そのため、米を作らない田んぼで

は、飼料やトウモロコシの生産を始めました。

また、県内の稲作農家の仲間と共同で、米の加工品にも着手しました。米を麺に加工し、米粉はより細かくして、レシピと共に売ること、気軽に料理に取り入れてもらえるよう工夫しています。今後はもう少しゆで時間の短い米麺へと改良したいとのこと。

―下呂市の農業の発展について―

「地元で見向きもされない

ものは外でも売れないんです」と、悠さんは熱く語ります。この地で生まれ育った悠さんにとって、やはり地元の人に「おいしい」と言ってもらえることが一番うれしいそうです。下呂市で作った農産物はまずは地元でたくさん消費してもらいたい。そのためにも、青年農業士として下呂市の農業をもっと元気にしていきたいそうです。若い農業士の柔軟な発想で、今後も新しいチャレンジは続きます。



米の販売先確保と
加工による
付加価値向上に
余念がない中島さん

